

■受験対策ミニ講座 8号■

秋も深まり、勉強しやすい時期となりました。遅れ気味の方も、集中力を高めて本気になればまだ大丈夫！短時間でも毎日、努力を続けましょう。「お風呂につかっている間に取り組むために“風呂場用参考書”を用意した」という話を聞きました。自分自身を励まし“エンパワーメント&ストレングス視点”で前進していきましょう。

今回の『相談援助の理論と方法』は最も多く出題される科目です。半数は事例問題なので、必ず過去問を解いてみて下さい。解き方のコツはPlus Columnで。

その前に基礎的な知識を確認しましょう。システム理論は、複雑な現象を一つのシステムとして捉え、要素間の全体的関連を解明しようとする自然科学的な方法で、いろいろな分野で応用されています。

第8問<<相談援助の理論と方法>>—————

〔28回99〕システム理論に基づく相談援助の対象に関する次の記述のうち正しいものを一つ選べ。

- 1 クライアント・システムの単位は、小集団に限られる。
- 2 人と環境との全体的視座から把握される。
- 3 家族への対応は、援助の全過程で、問題の原因となる構成員に焦点化される。
- 4 実践者の志向するケースワークなどの特定の方法によって把握される。
- 5 相談援助の対象としての個人は、システム概念から除外される。

回答は下へ↓

■Plus Column ・ ・ ・ ・ ・

【事例問題の解き方】

試験全体で事例問題は全体の約2割、みなさんの大きな得点源ですが、読み方を間違えないように注意が必要です。問われているのは“あなたの考え”ではないことに注意！“試験アタマ”に切り替えて、「設問が求めているもの」を冷静に読み取ることです。

最初に、「1つ選べ・2つ選べ」か、をチェックしましょう。事例問題に「2つ選べ」は多いパターンです。

次に「いつ・どこで・誰が・誰に」の設定をチェックします。「いつ」は介入のタイミング。「初回面接」「初期対応として」「モニタリングの後」などと明記されている場合があります。「この段階での対応」とあったら、「どの段階？」と思って、慎重に注意深く読んで下さい。

「どこで」は、面接室、自宅、路上などの場所。電話対応の場合もあり、それぞれに「最も適切な対応」は違ってきます。

「誰が」は、主語が「社会福祉士」や「ワーカー」なのか、各分野の専門員なのか、スーパーバイザーなのかなどに着目します。介入の対象も本人、家族、近隣住民、民生委員などによって、対応に違いがでてきます。

このほかに、「〇〇アプローチでは・・・」や「〇〇モデルでは・・・」という設問もあります。

試験問題はすべて“日本語の読解力”が試されるという側面があります。事例問題は特に、設問が要求していることと事例の内容をしっかりと読み取る！これが事例問題解答のコツです。

〔28回99〕の正解と解説—————

システム理論に基づく相談援助の対象に関する次の記述のうち正しいのは2。

1×

クライアント・システムの単位は、小集団に限られる。

クライアント・システムは個人・家族・小集団・組織・地域社会が含まれ、小集団だけではありません。

2○

人と環境との全体的視座から把握される。

3×

家族への対応は、援助の全過程で、問題の原因となる構成員に焦点化される。

システム理論では「人と環境の全体的視野」からとらえることに特徴があり、「問題の原因となる構成員」に焦点化することはありません。

4×

実践者の志向するケースワークなどの特定の方法によって把握される。

システム理論に基づく相談援助の対象を「特定の方法によって把握」することはありません。

5×

相談援助の対象としての個人は、システム概念から除外される。

システム理論において、個人をシステム概念から除外することはありません。